

Shimonoseki Rekijyo-Kikoh



そこに愛があるから!

下関・歴女紀行

～維新を支えたさまざまな愛のカタチ

32歳という若さでこの世を去った幕末のヒーロー、坂本龍馬。その足跡をたどるべく、歴女ライターの小坂章子さんが、好奇心全開で下関へ向かった。恋女房のお龍との日々、高杉晋作ら長州藩士との熱い絆など、長府博物館の学芸員さんの案内で次々に知る新発見に感動。龍馬の面影を追う旅は、明治維新胎動のまちに惚れて溶けこむ濃厚な時間となった。

取材・文＝小坂章子 撮影＝志賀智

長府に残る遺品から
ひもとく龍馬の暮らし

関門橋の袂、砲台跡から海峡を望む。快晴、風ぎ。幕末、外国船に逆襲された記憶などみじんも感じさせない、おだやかな関門海峡だ。坂本龍馬（1836-67）も、くしゃくしゃの袴を潮風にはためかせ、この大海原を見つめていたのだろうか。ザザーン——、ザザーン——。寄せては返す波が、私を文久時代（1861-63）へと誘っていく。

龍馬の幕末ストーリーは、28歳で土佐藩を脱藩するところから始まる。一路下関で志士のパトロン的存在だった勤王商人白石正一郎邸をめざし、その後、江戸で勝海舟（1823-99）と出会う。「日本をいまいちど洗濯し、正しい国家のすがたに……」という名言はこの頃に生まれた。その後、長崎で海運業社「亀山社中」を立ち上げ、それまで犬猿の仲だった薩長両藩を仲介するため各地を奔走、明治維新の先駆けとなる薩長同盟を締結させた。だが、その短い生涯を終えるま

壇之浦のみもすそ川公園には、幕末の攘夷戦で外国船に砲撃した長州砲のレプリカが5門設置されている。偶然にも撮影の日、製造に関わった鋳物師・安尾家の子孫の方々が見学に訪れていた。

